

平野謙 文藝時評

平野謙 ● 文藝時評 ● 河出書房新社

文藝時評

平野謙

定価 980 円

昭和38年8月25日 初版発行

昭和38年11月20日 再版発行

発行者 河出孝雄

東京都千代田区神田小川町3ノ8

印刷者 草刈親雄

東京都新宿区住吉町95

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町3ノ8

電話 東京(291) 3721 振替 東京10802

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

落丁乱丁がありましたらお取替えいたします

1963. 11. ©

目 次

昭和二十一年	七
昭和二十二年	一七
昭和二十三年	三三
昭和二十四年	四三
昭和二十五年	五一
昭和二十六年	六二
昭和二十七年	七六
昭和二十八年	七
昭和二十九年	九
昭和三十年	一五

昭和三十一年	一四七
昭和三十二年	一八一
昭和三十三年	二二五
昭和三十四年	二四九
昭和三十五年	三〇一
昭和三十六年	三七二
昭和三十七年	四四三
昭和三十八年	五一三
あとがき	五四七

索引

装
幀
庫

田

翠

文
藝
時
評

昭和二十一年

- 天皇神格否定宣言
- 軍国主義者公職追放
- 第一、二次農地改革
- 労働組合法施行
- 婦人参政権による最初の総選挙
- メーデー復活
- 全日本産業別労働組合会議（産別）結成
- 日本国憲法公布

- 中央公論、改造、三田文学復刊
- 世界、人間、展望、新日本文学、近代文学、群像創刊
- 日本文芸家協会再建、日本著作家組合結成
- 現代かなづかい、当用漢字決定
- 政治と文学論争、世代論争、第二芸術論争等おこる

- 灰色の月（志賀直哉）○赤蛙（島木健作）○踊子（永井荷風）○勲章（永井荷風）○浮沈（永井荷風）○「新」に惹かれて（正宗白鳥）○播州平野（宮本百合子）○妻よねむれ（徳永直）○暗い絵（野間宏）○桜島（梅崎春生）○思ひ草（宇野浩二）○白痴（坂口安吾）○風知草（宮本百合子）○かういふ女（平林たい子）○焼跡のイエス（石川淳）

昭和二十一年一月

昭和十六年十二月八日、私は朝寝していて、迂濶にも太平洋戦争の勃発を午後にしたるまで知らなかった。開戦の宣告は、当時の鬱屈し低迷した悪気流をつんざく大手術のような爽快感を多くの人にもたらしたようだが、なぜか私にはそんな「晴ればれしい気持」は味わえなかった。同時に、一部の敗戦論者や和平論者のうかべたにちがわぬ深刻なしかめ面も、また私のあずかり知らぬところだった。

第一、私は真珠湾攻撃という雄渾な(?)作戦がその雄渾においてぴんとこなかった。私はただ名状しがたい恐怖にとらわれた。夜になって街々には警戒警報がしかれ、防空演習ならぬ本物の最初の暗黒と沈黙は、私の恐怖感をあふりたてた。しかし、私はその恐怖の実感を迅速に忘却した。

昭和二十年八月十五日、ラジオのない一鉢山の寮に仮寓していた私は、やはり午後になってはじめて敗戦の事実を知った。青天の霹靂(へきれき)のようなその報知に、私はただ呆然自失した。戦争が終結した、戦争もまた終るものなのだ、という納得したい事実の前に、私は芸もなく棒立ちとなった。無論、無知な私といえども、原子爆弾の出現、ソ連の

参戦などによって、終戦(こんな便利な言葉は思いもつかなかったが)の近きことを暗々裡に予想せぬではなかった。だが、アメリカ軍の一回の本土上陸もない以前に、無条件降伏というかたちで戦争が終りになろうとは、夢想だにしなかったところだ。私は呆然自失のままに配達された号外をむさぼり読んだ。私は「終戦の詔書」を読み、御前会議の経過を読んだ。私の頭には、詔書のなかの「五内為ニ裂ク」という破格の言葉と、白の手袋を竜顔にあてられたという、廟議決定の経過報告には不似合な一節とだけが灼けつくように残った。私は、ひとり声をのんで泣いた。わけもなくあふれでる涙をどうしようもなかったのである。まもなく私は新聞上に「天皇制打倒」という文字の堂堂掲載されているのを見て愕然とした。それはほとんど三年テーズそのままの復活ではないか。

文芸時評というようなことをするのは実に久しぶりで、私なりに感慨のとどめあえぬものがあるが、私はその冒頭に文芸時評などにはふさわぬ個人的な感慨をしるしておきたい希いを押えることができなかった。

私は昨年六月から七月にかけて九州の田舎町から留守宅疎開のために上京し、無慙に亡失した東京の廃墟に面接しながら、語りつくせぬ辛勞のうちに女房と二人だけでどう

にかガラクタを信州に疎開させたのだが、その間私の胸裡に去来したのは、あの開戦当時のなまなましい恐怖感だった。なぜあの恐怖感を私は速かに忘れはて、たえずよみがえらせようと希わなかったか、という一種の悔恨の念にほかならなかった。喉もとすぐれば熱さを忘れる。今度こそ私は私の感銘を忘れまい。たとえ八月十五日の私の涙が一時的な感傷にすぎず、そのような感傷に固執することが今日ではもはや単なる「反動」にすぎぬとも、私は私なりの実感を見喪わず、昨今の惑乱する時世によみがえらさねばならぬと思うものだ。

このささやかな希いをぬきにして、一時評家として、^{びやう}眇たる発言をこの混沌たる社会になげかけるいかなる意味が残されているか。私は民主主義という「主義」のいかなるものかを知らぬ。その具体化がこの日本にいかなる形をとるべきかなぞ知りたいとも思わぬ。また、私は天皇制の精確な歴史を知らぬ。しかし、日本人の肉体と伝統をぬきにして、天皇制の問題をいかに解決すべきかなぞ口に出して語りたいとも思わぬ。まして広汎な人民大衆の民主主義的な文学的発声というような問題にまわらぬ思案をこらそうとは思ひもそめぬ。ただ私は今日現在にいたる私なりの実感に固執することで、この久方ぶりの文芸時評をはじめた

いと希うばかりである。私といえども、二度と芸もなく押し流されっぱなしに流されたくないのだ。文学者なら、どんな時世にめぐりあおうと、自己の肉体をおきざりにするわけにはゆかぬという事実を、おたがいにかい代価を支払ってまなんだはずではないか。

新聞をみると総合雑誌がやたらに創刊、復刊される。総合雑誌のうちにこそ、現代文化の最高の表出があるという昔ながらの無邪気な信仰は、今日といえどもぬぎがたい迷信を形成している。だが、当代の頭脳がほんとうに総合的な角度から編集した権威ある雑誌が、そう幾種類も生れるはずもない。

文芸雑誌も相当創刊されたが、文芸雑誌なら文芸雑誌らしく編集してもらいたい。総合雑誌なみに鹿爪らしい巻頭論文をすえないと恰好がとれぬというような古びた観念をこのさい払拭する必要がある。『人間』創刊号に西谷啓治の『国民文化とヒューマニズム』という巻頭論文がある。時評家の義務として通読したが、読過中、その冷静な学者面に焦躁の念を禁じ得なかった。

西谷の結論を一口にいえば、ヒューマニズムは本来個性と国民性と世界性とを内に貫徹していなければならぬとい

う点にある。なんとか即かんとかいう例の精妙な哲学的レトリックを用いて。いかにも個人主義と国家主義と世界主義とは本来対立すべきではないかもしれぬ。しかし、今日の問題は、そういう言葉を使えば、ヒューマニズムとエゴイズムとの怖るべき対立、そのなまなましい二律背反のうちにこそある。この深刻な対立の実感を外に、一足飛びにゲーテのようになれといつてみても無駄である。むしろ今日の問題解決の道は、文学的には各自がいかにして小林秀雄のいわゆるウルトラ・エゴイストたり得るかという方向にある。すくなくとも、私には文芸雑誌に西谷啓治のような小綺麗な哲学的論文は無用の閑文字とみえた。

私のいいたいことは、総合雑誌なみのもっともらしい言説などすくなくとも文芸雑誌には御免蒙りたいという私なりの実感にほかならない。私はただ現在に根ざしたよき小説とよき文芸評論が読みたいのだ。

私は眸をこらして永井荷風を読み、正宗白鳥を読み、里見弴を読み、志賀直哉を読んだ。荷風の小説は三篇読んだが、やはり「踊子」(展望)が出色の出来ばえだろう。もはや七十に近いこの老大家が、戦争中ひとり黙々としてかかる世界の描写に沈湎していたという事実は驚くべきことだ、などといったものはじまらぬ。私はこの老大家の昔かわ

らぬ非情と肉感に敬礼するが、「腕くらべ」「つゆのあとさき」「澤東綺譚」の世界よりやはり色あせてみえたのはいかんともしがたい。

白鳥では「新」に惹かれて(人間)が面白かった。相変らずの白鳥的世界という通り言葉のうらに隠れて、この不愛想な老大家の時流にピントを合せるジャーナリスティックな手腕に一驚した。林美子や丹羽文雄は職人芸の巧みさにとどまる。島木健作の遺作を二つ(黒猫「赤蛙」)読んだが、晩年陥っていたこの作家の孤独な世界がうかえると同時に、描写の骨法を最後まで体得し得なかったこの人の不幸と、それゆえにこそ花さいたヒューマニズムではなかったかという疑惑とに黯然とした。先頃私は文学の面白さは「われを忘れる」面白さと「身をつまされる」面白さにつぎると書いたが、総じて「われを忘れる」欲びも「身につまされる」哀しさもたつぷり味わえた、というわけにはゆかなかった。

ただ志賀直哉の「灰色の月」(世界)だけが、わずかに敗戦直後の文学作品として心に残った。ヒューマニズムとエゴイズムとの対立は、一個の文学作品としてここに簡潔に提出されてある。「小僧の神像」を書き、「十一月三日午後」の事」を書いた作者の面貌はこの小篇にもしかと保持さ

れている。しかし、今日の問題は「昭和二十年十月十六日の事である」と作者が欄筆しなければならなかった、まさにその点からはじまるのだ。ほかに、三宅雪嶺が死を旬日の後にひかえながら、みずみずしい感想をもらしている心境に感銘した。

昭和二十一年七月

坂口安吾の近作が戦後第一級の文学作品たることに疑いないが、戦争という事実をまともに受けとめ、その痕跡をよく文学的に定着させた作品として、「外套と青空」（中央公論）は「白痴」（新潮・六月）におよばぬ、と漠然と感じていた。だが、再読してみても、作の仕上げという点では「白痴」の混沌は「外套と青空」の純一に及ばぬことがわかった。空襲というような題材の面にいくぶんたぶらかされていたらしい。

「外套と青空」には直接戦争の影はさしてはいない。しかし、戦争によってあらゆる既成のノルムの崩壊したまんなかに、作者はけなげにもつたっている。作者はその荒廃のただなかから手ぶらで歩きだす。そこで作者は「いささかの傷みも残されず、小さな皺も、ひとつの埃すらもとど

めてはいない」無垢な女人の肉体につきあたった。信頼するにたたる唯一の手ごたえとして、作者は肉感というものを青空のもとに肯定せざるを得なかった。しかし、そのかけがえのない肉感に、ノルムの枠をとりはずされた孤独感や人間苦はよく解消されたか。これが一篇の眼目だ。

「外套と青空」はそのテーマの純一性を過不足なく生かした佳作である。しかし、「白痴」の主題はもうすこし複雑である。そこにはまず最初に卑小な俗世間というものがある。それをつらぬく「不思議な掟」というものがある。その実人生を「虚妄の影」として、作者は「生の情熱を託すに足る真実」を確然と対置したいと希った。白痴の女はその象徴にほかならない。作者は聖なる「白痴」のうちに生の真実を一応つかんだ。だが、やはりその真実の中味は、動物的な生衝動と本能的な死の恐怖にすぎなかった。それは実人生の「掟」をよく止揚し得ない。作者の筆はそこで動乱し、必要以上に空襲の細密描写などつみかさねて摸索をつづける。空襲をのがれたとき、いったんは新しい人間の更生を錯覚するが、その実体は依然として「豚」の醜悪にほかならなかった。何をたよりに「明日の希望」をつかもう？　そこで小説は終っている。しかし、「明日の希望」とは陳腐ではないか。問題は空転し、そもその出発点か

ら後退している。「明日の希望」などはじめからどこにもありはしない。傑作になりそこねた力作たる所以だろう。

昭和二十一年九月

近頃人に逢うと「やられましたね」と挨拶されるので閉口する。中野重治が荒正人と私とをならべて二つに斬った文章（新日本文学・第四号）を指してそういうのだ。むかし宮内寒弥が長屋すまいの私の部屋を、あろうことか「ゲーテの書齋」（！）などとからかったため、ひとしきり逢う人ごとに持ちだされて腐ったことがあるが、今度はまた膳佳之助（！）なみに「反革命」のデマゴーグと極印づけられたので「ゲーテ」以上にまいった。

性来弱気な私は「対他言」や「怒号言」を好まぬ。ことに斎藤茂吉や中野重治のような論戦の妙手を向うにまわしてわたりあう気力は本来ない。だが、問題は個人の好悪を離れた点に存在し、中野の批評を機縁にすこしでも問題の所在が明らめられれば、と思って一応反駁文みたいな文章を他の場所に書いた。ここでその続きをむしかえずつもりはないが、総じて中野の問題処理の手つきは「政治的」にとどまっているように思えてならぬ。「批評の人間性」を

強調する人の批評文が「政治的」処理に終っているのが腑におちない。私自身「反革命」のレッテルを押されたからそういうのではない。

中野重治は近著「日本文学の諸問題」のなかで、現在の「民主主義的文学運動」が「過去のいわゆる（？）プロレタリア文学運動」より後退しているか、前進しているかという重大な問題を提起して、「運動の正規の成功、発展」にほかならぬと、きっぱり断定している。それはいい。しかし、その断案の理由づけが私には曖昧至極に思える。

それはプロレタリア文学運動（「いわゆる」などという扱いをそれはそれ自身許すものではあるまい）の全的抹殺——とまでゆかなくとも、全き歪曲の上に成立しているのだ。ほかならぬ中野重治がプロレタリア文学の歴史を歪曲してまでも、今日の「民主主義的文学運動」をすくいだそうとしているところに、私は「政治的」な臭いをかく。同時に、そんなにまでして押しだされた「民主主義文学」そのものに疑惑を抱かざるを得ぬ。新日本文学会の掲げる「民主主義文学の創造と普及」という旗じるしは真実正しいか。

「新日本文学」第四号（八月）には小沢清という「廿五歳の青年労働者」の作品「町工場」が掲載されている。おそ

らく作者の体験を語った作品と思うが、この主人公のような着実な青年が戦争中作に描かれたような日暮しをしていたという事実はまさしく感動的だ。この作品を掘り起した新日本文学会は会の名において自慢していい。それは講演会や支部組織の活動とは比較にならぬ会の手柄である。

北海道から出ている「組合旗」という雑誌に佐々木宣太郎という人が「病舎にて」という獄中記を連載している。中野重治がほめていたので（私はむかしから芸術鑑賞家・中野重治を信用している）、雑誌をかりて一読し、やはり心うたれた。この作者も早晚新日本文学会に結びつき、そこで作品を発表するようになるだろう。こういう事実は今後続出するかもしれない。しかし、はたしてそれが「民主主義文学」の成功、勝利だろうか。

佐々木宣太郎の「病舎にて」には、鈴木清の「監房細胞」のようなはなばなしい雰囲気はみじんも見られぬ。戦争中の苦しい受け身の闘いがあるばかりだ。そこには、病人の主人公に給与すべき牛乳を古参の雑役と看守とが結託して横領する話がかかれてある。それを看破した主人公の「押えてもくぐり返して来る憤りのために小半日の間悩まされた」話がかかれてある。火の氣のない病舎で、腰の

きかぬ主人公が夜中ひそかに「大飯器（御汁椀）」を「漕瓶」代りに使う話も書いてある。朝食前に配られる湯で洗い、その大飯器に改めて汁を入れてもらうのだが、そんな行為は無論「反則行為」で、「発見されたら最後どんな目に遭わされるか知れたものではなかったが」「幸いにも（！）秘密裡にこれをやり通すことが出来た」話がかかれてある。癖のない筆つきで描かれたこういう事実は、それだけ人の心をしめつける。

新日本文学会のまわりに、この「病舎にて」や「町工場」のような質樸な作品が花さいてゆくことはいかにも会自体の成功だろう。この二作を大日向葵の「マッコイ病院」（新潮・八月）や阿川弘之の「霊三題」（新潮・八月）などのむなしい平明に比較した場合、新日本文学会の会としての強味はいっそう明らかとなる。しかし、それは人民の歌口がいまようやくほころびかけた、という事実にすぎない。人民の文学的発声ということはたしかに文学の民主化にちがいないが、どんな良質な芽ばえであれ、それ自体が「民主主義文学の創造」とはなるまい。

志賀直哉の「兎」（素直・第一集）を読むと、「穴を作り、その中に仔を生んだらしく、掘って見るとよれ曲った四五尺の深い穴の底に四五疋小さな兎がかたまっていた。藁だ

けでなく、母兔は自身の胸の毛をむしり取って、それを一緒に敷いていた。母兔の胸は紅く肌が見えていた」という文章にぶつかり、読者は思わずハッとする。「胸は紅く肌が見えていた」という何気ない文章の感銘は志賀の場合格別のことではない。しかし、それを佐々木や小沢らのと較べれば、やはりそこには確然たる質の相異がある。いってみれば、真実と事実との相異にほかならない。

志賀直哉のような大家と、これから書きはじめようとする小沢清らを同列におくのはまちがいだという人があるかもしれない。もっともらしい俗論だ。

「座右宝」四・五号に志賀直哉の写真が載っている。はじめはなんの気なしに雑誌をめくって、美しい年寄りの顔だなあと感服したが、あとで志賀の近影と知ってビックリした。

むかし私は改造社版「現代日本文学全集」に載っている、眉の濃い、額に静脈のすけてみえる志賀の写真（²）を立派だと感心したものだ、今度のはただただ美しかった。眼の澄みかた、頬から頤にかけての穏やかな線。この老年の美しさにまで醇化されてこそ「胸は紅く肌が見えていた」という一片の文章も流露する。心の柔らかくしなやかな青年期にかけがえのない体験を一篇の物語に綴って人を

感動させるのはそんなに困難なわざではない。しかし、志賀直哉のような老年の美しさに裏うちされた「作家の眼」は誰でも養い得るものではなからう。

小沢清のような質実な青年が日暮しのかたわらで、戦争中も周囲と自分の心のまんなかを静かにみつめて「町工場」のような作品を書きあげたことはほめられていい。しかし、小沢は今後小説書きとして自己の道を押しつらぬくつもりだろうか。文学の道は所詮片手間仕事では押しとおせぬ。ここに小沢のように実生活に密着した文学的地点から、出発しようとするものの特別な困難がある。

小沢の才能をみくびってそういうのではない。ただ一般にいて、働く人民の文学的発声はたしかに文学民主化の勝利にちがいないが、文学の普及と文学の創造とはやはり区別されねばならぬからである。ひとたびは文学作品にも晶化する青年個々の初々しい純粋が、そのまま志賀直哉の「作家の眼」にまっすぐつながってゆく場合は、千人にひとり、万人にひとりしかない。わしも学生の時分には小説を書いてみたものだ、と告白する大人は案外に多い。単に資質だけの問題では片づかない。

野間宏の「暗い絵」（黄蜂・一号、二号）を読み、梅崎春